



TITLE:

<朽木フィールドステーション>朽木フィールドステーションの活動概要

AUTHOR(S):

今北, 哲也

CITATION:

今北, 哲也. <朽木フィールドステーション>朽木フィールドステーションの活動概要. 実践型地域研究中間報告書: ざいちのち 2011

ISSUE DATE:

2011-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/147989>

RIGHT:

朽木フィールドステーション



Field Station KUTSUKI

朽木フィールドステーションの活動概要

朽木FSでは、滋賀県湖西・湖北地方の山里で「くらしの森」づくりに取り組んでいます。びわ湖源流域では、1960年代まで周りの山々から恵みを得ることで日々のくらしを立ててきました。そこでは山の恵みを一方的に受けとるだけではなく、人の側も山の潜在力を引き出すための知恵や工夫をこらし、技を磨いてきました。このような人と自然との相互関係を通じて人のくらしを支えてきた山林原野を、私たちは「くらしの森」とよんでいます。

しかし、工業化社会は山の奥へも浸透してきました。山の恵みに代わる品々が身近になってきました。農業機械が普及し、薪炭林は人工林に変わり、山に依拠するくらしが薄れてきました。さらに、過疎化や野生動物による食害が深刻になり、「くらしの森」の手がかりは失われつつあります。このようななかで、時代にかみ合った「くらしの森」をつくりだすことが必要です。新しい「くらしの森」の再生は、将来世代が山の村でくらししていくための素地をつくることにもつながるでしょう。

朽木FSの取り組みは、「くらしの森」づくりを試みるための山林原野を確保することから始まりました。いくつかの山里を歩いて費やした時間は実践研究そのもので、今後のための貴重な体験となりました。そして、雑木の二次林、原野、休耕田、草地などに縁をいただき、実験地として使わせていただけるようになりました。山の恵みを活かしたしごとづくりが可能となる広さの森。そこへ至る前進基地として、4ヶ所で取り組んでいます。

古来より、山がもたらし、山に活かせる術の素として、「水」と「火」があります。これらに注目し、山里にのこる技に現代の技術を組み合わせることで、「くらしの森」を育てる<道具＝システム>として活かすことができます。たとえば、「水」のエネルギーを使いやすくしたものが水車装置であり、これは朽木で実験をおこないます。「火」のエネルギーの実験地は椋川と余呉です。椋川では湖西の伝統的なホトラ山の雛形を造成し、余呉では2008年から火入れの試みを始めました。具体的な取り組みについては、続くページで紹介します。（今北哲也）

